北海道医療大学大学院心理科学研究科
言語聴覚学専攻

ニュースレター

No.3
2009年3月

Graduate School of Psychological Sciences
Health Sciences University of Hokkaido

文部科学省 大学院教育改革支援プログラム 採択「言語聴覚士卒後研修プログラムを含む大学院」

大学院における言語聴覚士卒後臨床研修プログラム

―― チーム医療における役割 ――

北海道医療大学大学院心理科学研究科言語聴覚学専攻では、大学院における言語聴覚士卒後臨床研修プログラムとして、医師、言語聴覚士、看護師をお招きして大学院における言語聴覚士養成教育の在り方について議論いたしました。さらに大学院における卒後臨床研修プログラムの内容を検討し、チーム医療において言語聴覚士が専門性を発揮していく方法についての報告・検討が平成20年12月6日、7日の二日間、大学共同利用施設（Advanced Center for Universities[ACU]）において多数の参加者を迎えて行われました。

■平成20年12月6日

シンポジウム 1
言語聴覚士の専門性と今後の展望

シンポジウム 2
言語聴覚士臨床技能教育の課題と改善の方向付け

■平成20年12月7日

シンポジウム 3
臨床実技教育の内容と目標

パネルディスカッション
チーム医療と言語聴覚士

シンポジウム 1

言語聴覚士の専門性と今後の展望

1 開会とシンポジウムの趣旨　◎及川　恒之（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 学科長）
2 大学院における言語聴覚士卒後教育　◎阿部　和厚（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）
3 チーム医療における臨床医とコメディカル　◎橋本　政明（特別医療法人明生会 網走脳神経外科・リハビリテーション病院 理事長）
4 臨床医からみた言語聴覚士教育の課題と期待　◎田中　美郷（帝京大学 名誉教授）

座長記

シンポジウムの最初は、「言語聴覚士の専門性と今後の展望」というテーマで講演と討論が行なわれた。まず、及川恒之学科長から、開会の挨拶とシンポジウムの趣旨が紹介された。シンポジウム最初は本学阿部和厚教授から「大学院における言語聴覚士卒後教育」と題して、本学の取り組みが紹介された。次に、橋本政明先生（網走脳神経外科・リハビリテーション病院理事長）から、「チーム医療における臨床医とコメディカル」と題したご講演をいただき、実際の現場でのチーム医療について理解を深めることができた。最後に、田中美郷先生（帝京大学名誉教授）より、「臨床医からみた言語聴覚士教育の課題と期待」と題したご講演をいただき、言語聴覚士に求められているもの、めざすべき道が示された。橋本先生、田中先生は長年、実際の臨床に携わり、言語聴覚士の仕事をサポートして下さったことからも、より深いご理解とご示唆をいただき、有意義なご講演であった。

（大槻　美佳准教授）

及川　恒之
（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 学科長）

橋本　政明
（特別医療法人明生会 網走脳神経外科・リハビリテーション病院 理事長）

田中　美郷
（帝京大学 名誉教授）

シンポジウム 2

言語聴覚士臨床技能教育の課題と改善の方向付け

1 言語聴覚士臨床技能教育の課題　◎藤田　郁代（国際医療福祉大学 教授）

2 現場の言語聴覚士の意見　◎長久　奈緒子（社会医療法人北斗 北斗病院 言語聴覚士）　◎光田　由美子（医療法人社団隆豊会 磯病院 言語聴覚士）

3 言語聴覚士臨床教育に対する意見 調査報告　◎今井　智子（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）

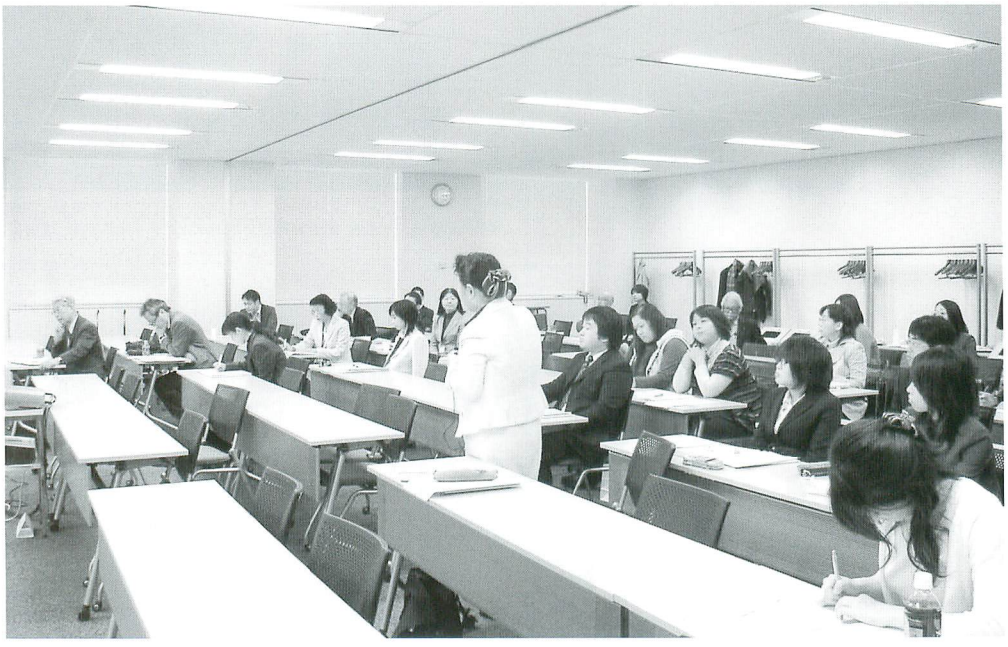
4 米国における言語聴覚士養成 調査報告　◎森　壽子（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）

座長記

本セッションでは、5名の先生方からご講演いただいた。まず、「言語聴覚士の臨床教育の課題」（藤田郁代先生・国際医療福祉大学）では、日米のカリキュラムを比較した後、国際医療福祉大学の臨床教育カリキュラムの構造を紹介された。学内・学外の実習が体系化されており、見学・ボランティアから、評価実習、臨床前試験（筆記、OSCE）、総合実習、関連職との連携実習、研修会や症例検討会による卒後実習、大学院での臨床と研究の統合まで、各段階での習得内容が示された。日本での今後の課題として、臨床教育環境の整備や体系化、実習内容の明確化、指導者の育成、卒後研修のシステム化等を挙げられた。

次に、現場の言語聴覚士からのお話を伺った。「現場の言語聴覚士の意見」（長久奈緒子先生・社会医療法人北斗北斗病院）は、学生実習について、勤務する病院内でのSTに対するアンケートの報告をされた。実習生は、不安を持ったまま実習に臨み、知識不足や指導者の言葉に自信をなくし、指導者は、学生の能力への期待と現実のギャップに戸惑っている様子が見られる。実習生は、基礎的な知識、コミュニケーション能力、STとしての自覚を持って実習に臨むこと、指導者は、実習生の個性・能力を早期に把握して指導すること等が求められる。

「現場の言語聴覚士から見た臨床技能教育の課題」（光



田由美子先生・医療法人社団隆豊会 礒病院）は、勤務する病院で小児患者が増加しており、発達障害児へは病院内、他病院、未就学児関連機関や学校と連携を取ってアプローチしていることを紹介された。発達障害児分野への熱意、幅広い医学知識、教育現場や他職種と連携が取れる能力、家族にアプローチできる能力等を臨床技能教育には期待されている。

最後に、臨床教育についての国内外の調査報告を行った。「言語聴覚士臨床教育に対する意見：国内調査報告」（今井智子教授・本学）は、大学院を持つ言語聴覚士養成大学、臨床施設に対するアンケート調査の結果を報告した。回答のあった4つの大学院では、臨床教育は、カリキュラム上配置されておらず、学生・教員の個別対応に任されていた。大学院の教育目的が臨床能力向上でないこと等から、大学院での臨床実習は必要とは考えられていない傾向があった。一方、臨床施設からは、大学院修了生に対して、研究能力だけでなく、学部卒業生よりも高い臨床能力が期待されていた。

「言語聴覚士の視点から見たアメリカの言語病理学士およびAUDの養成」（森壽子教授・本学）は、昨年3月の訪米調査の結果を元に報告を行った。米国の資格が、臨床実習に合計2年以上かける臨床免許と言えるものであるのに対し、日本の資格は知識を問うもので総実習期間が6ヵ月弱で済んでしまうことを指摘し、最近の動向や日米の教育システムの比較を報告した。大学院での研究と臨床のバランス、日米の資格制度の違いも考慮してのカリキュラム検討の必要性が訴えられた。

総合討論では、日本におけるオーディオロジスト養成、外部実習施設での指導者の待遇、専門学校学生と大学生の違いについて質疑が行われた。また、資格取得後の臨床教育の必要性について確認された。

（小松　雅彦准教授）

藤田　郁代
（国際医療福祉大学 教授）

長久　奈緒子
（社会医療法人北斗 北斗病院 言語聴覚士）

光田　由美子
（医療法人社団隆豊会 礒病院 言語聴覚士）

今井　智子
（北海道医療大学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）

シンポジウム 3

臨床実技教育の内容と目標

1 臨床実技教育の設計の基本　◎阿部　和厚（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）
2 臨床基本実技教育　◎西澤　典子（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）
3 聴覚・発達　◎森　寿子（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）
4 高次脳機能　◎亀井　尚（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）
5 発声発語・摂食嚥下　◎苅安　誠（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）

座長記

言語聴覚士が高度職業人養成を目的とする大学院での臨床実技教育のカリキュラムについて、教育の設計、総論、各論に分けて、北海道医療大学における大学院修士課程での臨床教育の現状を踏まえ、本学5名の教授により内容と目標について概要について講演が行われた。

まず、「臨床技術教育の基本設計」（阿部和厚教授・本学）は、学部教育の大きな流れとそれに続く大学院教育について説明がなされ、大学院における総合的臨床実践能力教育の重要性が強調された。有資格者として、臨床現場での実習を通じ、応用力、行動力、自律的な臨床実務能力を身に付けることが、基本的目標であり、チーム医療の中でそれらの能力を実践できることが重要であると述べられた。

次に「臨床基本実技教育」（西澤典子教授・本学）は、臨床において共通に必要とされる医療接遇、リスクマネジメント、チーム医療、臨床における文書等について、実例を踏まえて、基本的な考え方が説明された。医療接遇は、職務内容に適合した患者から信頼される態度及び行動であり職責を自覚した自己管理能力が重要であると説明された。リスクマネジメントに関して、迅速かつ柔軟な判断対応、組織としての対応、患者との信頼関係および診療実務力という支えの重要性が述べられた。臨床基礎能力として、医療面接、評価・検査に基づく合理的なデータ解析による臨床判断、根拠に基く評価、判断、EBMに則った合理的治療、診療実務を通してのインフォームドコンセントの重要性が説かれた。に関し、良好なコミュニケーション、正確かつ簡潔な情報提供、情報共有と問題解決への協働の重要性が強調された。

次に「聴覚・発達障害」（森壽子教授・本学）は、コアカリキュラムにある、学習目標の中で、当研究科で教育可能なもの、教育することが困難なものについて、個別に説明された。聴覚障害については、北海道医療大学での実習は、成人

阿部　和厚
（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）

西澤　典子
（本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授）

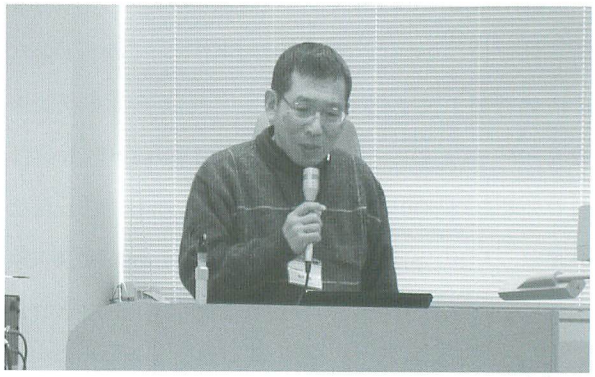
聴覚検査は可能であるが、幼児の聴覚検査は困難であること、幼児の訓練は可能であり、補聴器のフィッティングは見学可能であるが、人口内耳については実習が困難であり、外科治療を行っている他大学医学部附属病院等との連携が必須であると説明された。発達障害に関しては、修士課程で2年間では予後予測は困難であるという臨床教育の問題があるが、学習目標のほとんどが実習可能であると説明があった。

次に「高次脳機能障害」(亀井尚教授・本学)は、大学院での講義資料をもとに、必要とされる失語症の臨床技能に具体的な解説が行われた。 失語症の原因疾患、評価方法、失語症に関する疑問点、神経言語学およびその最近の成果としてGB理論、神経言語学に基づく評価・診断として、問診、自発話、モダリティ別言語検査について解説がなされた。

最後に「発声発語・摂食嚥下障害」(苅安誠教授・本学)は、発声発語と嚥下の関連に関する理論的背景、関連性、リハビリテーションの考え方について、概説され、臨床での思考力、観察力、必要とされる知識を身に付けることの重要性が確認された。大学院コアカリキュラムで必要とされる学習項目について、臨床における応用力が身に付けられるように理論的背景を踏まえて知識を学習し、考えるプロセスとして評価を行うことの重要性が強調され、音声障害、構音障害、嚥下障害について、それぞれ理論、評価、治療・訓練・指導における具体的に必要とされる項目を整理して解説が行われた。

(榊原　健一准教授)

森　寿子
(本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授)



亀井　尚
(本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授)

苅安　誠
(本学 心理科学部 言語聴覚療法学科 教授)

チーム医療と言語聴覚士

1 卒後臨床教育とチーム医療　◎阿保　順子（本学 看護福祉学部 看護学科 教授）
2 総評1　◎橋本　政明
3 総評2　◎田中　美郷
4 総評3　◎藤田　郁代
5 総合討論　◎招聘シンポジスト全員　◎本学教員　◎参加者

座長記

2日間にわたったシンポジウムの最後に、「チーム医療と言語聴覚士」というテーマでパネルデイスカッションが行われた。まず、阿保順子教授（本学看護福祉学部）から、「卒後臨床教育とチーム医療―専門性獲得に向けての道程（看護師教育の場合）」と題して看護師臨床教育における歴史、現状の課題、将来の方向性についてのご講演があり、看護の領域でも大学院修士レベルの専門看護師（Certified Nurse Specialist）制度が発足し、高度専門職業人養成が始まっていることが報告された。田中美郷先生（帝京大学）からは前日6日のご講演や討論を踏まえて、言語聴覚士の専門性やチーム医療におけるその役割について総評があった。橋本政明先生（網走脳神経外科リハビリテーション病院）と藤田郁代先生（国際医療福祉大学）は日程の都合でパネルデイスカッションに出席できなかったため、お預かりしたメッセージを司会者が代読した。橋本先生からは、シンポジウムに参加し、大学院においても臨床教育が重視されていて安心した、藤田先生からは、言語聴覚士教育における臨床教育の重要性を北海道医療大学からも全国に発信して欲しい、学部教育における臨床実習指導者の資格や指導内容についても言語聴覚士協会レベルでの検討が必要であるとのコメントを頂いた。

その後、長久奈緒子先生（北斗病院）、光田由美子先生（磯病院）やフロアの参加者も交えて活発な討論が行われた。チームが有機的に機能していないという現場の課題に対しては、コーディネータが必要である、メンバー間の情報の共有が重要であるなどの意見が出された。また、チーム医療において、各職種はプロフェッショナルな臨床技能を提供しなければならないが、技能習得には指導者の具体的フィードバックによる現場教育が重要であるとの意見が看護師・言語聴覚士の両者から出された。

（今井　智子教授）

阿保　順子
（本学 看護福祉学部 看護学科 教授）

チーム医療における言語聴覚士の役割について、パネリストの医師、言語聴覚士、看護師と聴衆の間で活発な討論が行われた。

Idaho State University

平成20年度

米国研修の報告

2009.2.7-17

平成20年度　米国訪問調査スケジュール

2月7日(土)	■成田空港 19:00 → San Francisco 11:20(7日) ■San Francisco 13:10 → Salt Lake City 16:00 ■Salt Lake City → Pocatello
2月8日(日)	■Pocatello着 ■TownePlace Suites Pocatelloに宿泊 (14日まで6泊)
2月9日(月)	■Idaho State UniversityをメインにIdaho州内のクリニックなどを見学　その他
2月10日(火) ～13日(金)	
2月14日(土)	■Pocatello→Salt Lake City ■Salt Lake City 17:08 → San Francisco 18:17 ■Renoir Hotelに宿泊(16日まで2泊)
2月15日(日)	■museum他を見学 (President DAY)
2月16日(月)	■San Francisco 11:15
2月17日(火)	→ 成田空港 15:30

◎訪問調査大学院生／木村 亜由美・高野 舞　◎随行教員／苅安 誠

大学院Projectの一環として、平成21年2月9日(月)～ 13日(金)に苅安と院生2名(木村・高野)がIdaho State University (ISU), Pocatelloキャンパスの Dept. of Communication Science and Disorders and Education of the Deaf (Health Profession学部に所属、SLPとAUD、Deaf Edの3部門からなる)を訪問した。訪問の目的は、大学院での臨床教育の内容を知り、本学のプログラムに反映させることであった。

今回の訪問は、学科長のProf. Anthony Seikel(Kansas大PhD.音声言語・聴覚科学・当時筆者の研究室仲間、Washington State Univ.を経て、アイダホ大学に赴任)に調整をお願いした。2年後にはOn-line SLP Programの展開、そしてSLP博士課程の開設を目指していた。なお、大学院生は、1学年30名前後、全体で約60名、出身はIdaho他、西部中心で、年齢層は高め、学部での成績GPA平均3.5前後とのことであった。

1
臨床実習

臨床実習は、ASHAの基準に基づいて、大学院生を対象に、学内と学外で行われていた。学内のクリニックは、SLP担当教授3名、臨床専任（非常勤）が数名で運営され、対象は言語障害、難聴、成人失語、構音障害、吃音、第二言語音声学習があった。形態は、春・秋学期に、院生1名が各学期2例を担当、評価・訓練・指導の計画と実施を小児言語障害中心に行っていた。学外は、病院・施設、学校、開業で、個々の学生が、多様な対象を経験できるように配置されていた。

観察の仕掛け

臨床場面の観察は、学部生の4年次で必修2科目の課題となっている（合計25時間）。観察ノートを片手に、見たこと・聞いたことを記録、講義中に学生全体へフィードバックをすることになっていた。観察室（マジックミラー越し）では、音声の聴取も可能（ヘッドホンあるいはスピーカ）、ファイルを置く棚があり、評価・訓練計画Lesson Planが閲覧できるようになっていた（観察者が実施内容をおおまかに知ることが出来る）。

臨床指導 Supervising の仕掛け

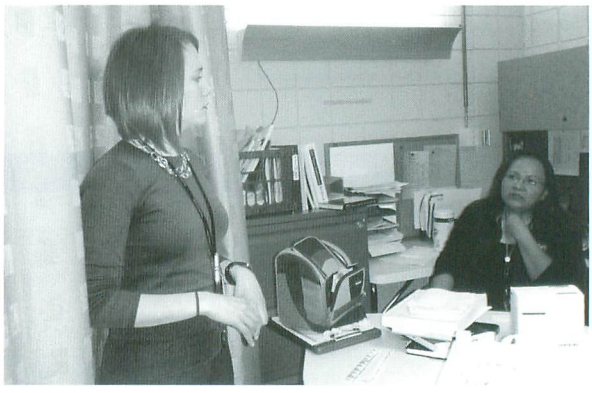
クリニックの部長が、学期前に症例の割り当てを準備する。学生は、学期始まりに評価の計画と実施（2時間枠）、学期中に訓練の計画と実施、学期末に経過報告書Progress Reportの提出を行う。指導者（症例担当のSV）とは、学期中に毎週定期のミーティング（1時間枠）を行い、計画の見直しや訓練の内容と成果を確認している（評価・訓練場面にも立会うあるいは観察する）。

不具合への対応（Deficiency Procedure）

誰もが臨床実習を円滑に問題なくすすめる訳ではない。うまくいかない場合には、SVとのミーティングで対策Action Planを立て、その実施状況を追跡する。それでも改善されない場合には、クリニック部長とのミーティング、そして学科責任者を交えてのミーティングとなる。

市中病院での実習

グループ（集団）訓練は学生2名が担当、SVが横で見ていた。嚥下障害患者へのベットサイド訓練（E-stim, DPNS）では第1・2試行でSVが手技を実施、学生が手伝う／やり方をみて、第3試行で学生にやらせていた。嚥下造影検査は、学生が準備、SVは見守り役、学生が実施し、評価報告をまとめていた。

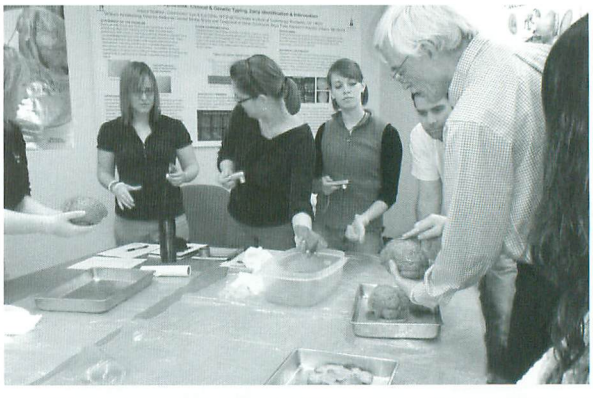


実習指導者と院生の打ち合わせ

2
講義・研究と展望

遠隔地を繋ぐ講義

アイダホ州立大学はPocatelloとBoiseの2キャンパス（遠距離、車で4時間）に別れており、学生はいずれかを基点として学習している。講義は、いずれかのキャンパスで行われ、TV・カメラにより、講義と学生の様子が双方に伝えられる。神経解剖の演習として、脳解剖も行われ、途中で学生も質問を行いながら、活発に進められていた（写真下）。



神経解剖演習、損傷と聴覚言語障害との関連について講義の内容を再確認していた

講義の目標・内容・課題・評価基準は、シラバスで提示、教科書・参考書・論文一覧も配布される。講義毎にReadingsが指定され、学科・図書館ファイルから各自がCOPYして読む。大学院の講義・演習はReadingが前提、学部生は試験をしないと読まないからクイズ（小テスト）で確認することになる。課題はPaperが一般的で、独自に文献を検索、APA様式に合わせて、Reviewを作成する。研究法の講義では、序論の書き方を解説、最後の段落（目的・仮説）を書いてから、全体を構成、10段落で書くという課題を出していた。

研　究

修士課程の学生は、修士論文あるいはPortfolio（科目内でのPaperを書き直したものや症例報告他からなる）が選択できる（博士課程に進むためには修士論文は必須）。進め方は、研究計画発表会（序論と方法が書きあがった段階）を行い、審査委員会（指導教授+審査員2名以上）で方法の問題点などを検討、ゴーサインが出れば、データ収集と分析、論文執筆、口頭試問（Oral defence）となる。

学科主催の「ピザ・パーティ」。院生たちも昼ごはんにdrop by

展　望

ISUでは、On-LineでのSLPプログラムを2010年秋学期から始める予定で、数科目を作成して試行を始めていた。土地柄、西部各州やアラスカからの学生が多く、街に出ると出身地に戻らないこともあり、居住場所を変えずに学習できるという利点もある（もちろん臨床実習の期間にはISUに来なければならない）。ちなみに、学費は400ドル／単位である。すでに問い合わせが多くあり、来年度の開講が大学・学部レベルでも期待されている。

以上、ISUで多くのことを学ぶことができた。院生にとっては、臨床実習での丁寧な指導、講義での意欲的に質問をする学生たち、が印象的であったようである。本学では、報告会（教員FD）と討議に基づいて、院生・学部生の見学（見聞録と考えたことに対して、疑問も記すノート）、院生の臨床指導体制（大学付属病院での担当者SVと院生の動き）、研究の複数指導教員チーム、講義・演習の内容整備、を今年度から実施、より充実した大学院教育の実現にむかっている。また、北海道は広く、大学院教育を（遠隔地の）社会人が受けることができるように、On-Line教育も検討すべきであろう。この点については、ISUと共同で講義・演習ユニットの開発をすすめ、環太平洋での教育ネットワークを形成することも、視野に入れて進めていきたい。

（苅安　誠教授）

REPORT 1

米国研修を終えて

北海道医療大学
心理科学研究科 言語聴覚学専攻
大学院博士課程2年

木村　亜由美

平成19年度の米国訪問調査に引き続き、20年度も米国研修の機会があり、約10日間の日程で、Idaho State Universityを中心に、関連病院や施設の見学をしてきた。

大変勉強になった項目の一つに、臨床研修の進め方がある。米国では、臨床指導専門の先生が在籍し、実際の臨床場面で手技のレクチャーや、訓練直後の指導が行われていた。「百聞は一見にしかず」という諺があるが、まさにそのとおりである。机上での論理より、一度の実施体験が大きな意味を持つのではないだろうか。大学卒業時点で国家試験に合格すれば資格を取得することはできるが、まだまだ臨床力はついていない。社会に出れば、たくさんの症例と出会い、経験を積むことはできるが、仕事に追われ、深く考える時間を十分にとれないのではないだろうか。また、先輩方も自分の仕事で手一杯で、指導まで行きつけないのが現状であろう。このような現状から、大学院での臨床研修の大きな役割は、指導下で症例について深く考え、質の高い臨床体験をすることだと感じた。

今回、初めての海外訪問だったのだが、様々な場面で言語障害を感じた。
貴重品をフロントに預けたつもりが放置されていたり、ファーストフードで注文ができなかったり…。パスポートを紛失したかもしれないと思うと、何度思い返しても恐ろしい出来事であった。

これらの体験を通して、相手に伝えることのできるコミュニケーション方法の確立が重要であることを痛感させられた。また、話し手だけではなく、聞き手の「聞く姿勢」もコミュニケーションの成立には大きな要因となることを実感できた。

言語聴覚士という仕事は、コミュニケーションや生活の質の向上に大きく貢献できる仕事である。自分の要求が相手に伝わったときの喜びは大きい。相手のツールを引き出すこと、そして、「聞く姿勢」の大切さを、少しでも多くの人に知ってもらえるよう、日々の努力を重ねていきたい。

REPORT 2

米国訪問調査を終えて

北海道医療大学
心理科学研究科 言語聴覚学専攻
大学院修士課程2年

高野　舞

今回、米国訪問調査に参加するという貴重な機会を得ることができた。訪問中は、主にアイダホ州ポカテロにあるアイダホ州立大学(Idaho State University:ISU)での講義の聴講、大学院生の臨床実習や関連施設の見学を行った。

日本での言語聴覚士(Speech Therapist:ST)の職種は、米国では言語病理学士(Speech Language Pathorogist:SLP)と聴覚士(Audiologist:AUD)のふたつに分かれており、その資格取得には、日本に比べより多くの学位や経験が求められる。ISUでもその制度に基づいた専門学科が設けられ、学部・大学院を通して教育が行われていた。

聴講した講義のひとつで、研究法つまり論文やレポート作成の際の考え方や書き方についての指導がされていた。また、大学院生の臨床実習では、実習計画を立て、実施し、指導を受けるという系統的な流れが確立され、行われていた。これらの知識や経験は、研究者、臨床家として必ず身につけなければならないものである。では自分はどうであろうかと省みて、改めて身が引き締まる思いであった。我が校においても、学生自身の学習意識と教育プログラムの両面での、より一層の向上が求められるだろう。

米国滞在中、ことばの大切さを痛感した。英語が不勉強なために、言いたいとこが言えないし、言われたことがわからない。ジュース1本を買うことですら、大変な緊張と努力を要する毎日であった。だが一方で、言語以外でのコミュニケーションの有用性も感じた。表情やジェスチャーで伝えること、相手を理解しようと努めることができれば、ある程度のやりとりは可能となる。11日間の生活から、今後自分がコミュニケーション障害と向き合っていく上で、非常に重要なことを学ぶことができた。

日本では、STはまだ発展途上の職種である。我が国の状況に応じた、より良い教育制度がつくられることを願いながら、自分自身の日々の努力を重ねていこうと思う。

INFORMATION

平成20年度 言語聴覚学修士修了生の研究分野と学位論文の題目、及び修了後の就職状況

研究分野 言語聴覚病態生理学

[題目]「ヒト神経芽細胞腫におけるニューロン・グリアへの分化機構」

就職先／札幌市内の病院（言語聴覚士）

研究分野 高次脳機能障害学

[題目]「パーキンソン病における標準注意検査法 Clinical Assessment for Attention（CAT）を用いた注意機能の検討」

就職先／札幌市内の病院（言語聴覚士）

研究分野 発声発語・摂食嚥下障害学

[題目]「健常児における前言語期の音声発達」

就職先／本学（助教）

研究分野 言語発達障害学

[題目]「言語発達障害児の音節分解能力と音節抽出能力に関する研究」

就職先／旭川市内の病院（言語聴覚士）※社会人学生につき、勤務先の病院

平成21年度 修士課程入学状況 6名

3名の一般入学の他、履修上可能であれば、就業しながら就学できる弾力的カリキュラムをそなえているので、3名の現職言語聴覚士が社会人選抜で入学した

北海道医療大学大学院
心理科学研究科 言語聴覚学専攻
（修士課程・博士課程）

わが国最初の言語聴覚学独立専攻の大学院です。課程修了後、言語聴覚学修士・言語聴覚学博士の学位を取得できます。

平成19年度文部科学省大学院教育改革支援プログラムに本大学院の「言語聴覚士卒後研修プログラムを含む大学院」が採択されました。

修士課程 高度専門職業人の養成（臨床研修中心）

言語聴覚士が扱うすべての分野の障害に対して、バランスのとれた高度な臨床実践力を身につけるため、隣接する北海道医療大学病院言語聴覚治療室ならびに関連医療機関で多数の症例を経験しながら、臨床研修を行います。さらに特定領域の研究を行うことにより修士論文を作成し、研究力の基盤を作ります。

博士課程 高度研究能力をそなえた指導的専門職業人の養成（研究中心）

修士課程の経験の上に、特定領域の研究を行い、博士論文を作成します。言語聴覚領域および関連領域の第一線で活躍できる研究者・指導者を育成します。

お問い合わせ先：北海道医療大学心理科学部 事務
Tel. 011-778-8931 Fax.011-778-8941

編集後記

このたびニュースレター第3号が発刊のはこびとなりました。昨年12月に行われたシンポジウムでは、チーム医療における言語聴覚士の役割について、医師、言語聴覚士、看護師、養成校教員など多様な立場・視点から実りある議論が行われました。また昨年に引き続き2回目の大学院生によるアメリカ研修が行われ、アメリカにおける臨床指導のあり方に関して多くの情報を得ることができました。私事ながら先日パリで開かれたパーキンソン病の国際学会に参加しました。5年ぶりに見るパリは、サルコジ政権のもとで精力的に様々な革新が行われていたのが印象的でした。フランスはもともと保守的気質が強く、伝統主義を貫いてきましたが、近年新聞、テレビで頻繁に取りあげられているのは「フランスは変わらなければならない」というスローガンであり、その中核としてエコノミーとエコロジーが強調されていました。将来を見据えて時代に合わせて変わっていくことの重要性を、多くの構成員が意識することの大切さを痛感しました。本プログラムがわが国における大学院教育改革の推進力となることを願っています。（I.T）

北海道医療大学大学院心理科学研究科 言語聴覚学専攻

ニュースレター

◎発 行 日／第3号 2009年3月
◎編集・発行／北海道医療大学大学院 心理科学研究科 言語聴覚学専攻
TEL 011-778-8931 FAX 011-778-8941
E-mail kazuabe@hoku-iryo-u.ac.jp

平成21年3月 発行